私はeラーニングを「今日イオンが情報技術を駆使して学習ツールを提供し、生徒の情報を管理できること。また、生徒はそれらを自由に活用できる環境であること」と教師と生徒の立場を合わせて定義した。しかし今回、評価について考えるにあたり、教師が生徒に行う評価に注目して考えていく。

　前提として私は従来のようないわゆる知識を問う筆記テストは必要だと考える。なぜならば、公平性、客観性の観点からしてこれ以上のものはないと考えるからだ。そのうえで、eラーニングでの評価は、知識習得までに生徒がどのような“プロセス”で“学び“をしてきたかにフォーカスする必要があるのではないかと考える。筆記テストの目的は勉強の定着度合いを評価するのであれば、eラーニングでは筆記テストでは評価のできないプロセスの部分を評価する材料がそろっている。しかし、生徒がどんなことに興味を持っていて、どのくらいそれらについて学ぼうとしていて、どのようにして学ぼうとしていたのかに正解も不正解もない。そのためこのプロセス自体の評価は非常に難しい。評価しようとすれば評価する教師の主観に大きく左右されてしまうおそれもある。そこで、私は卒業前に生徒自身の学びの歩みをeラーニングで蓄積した自分の学習記録を基に発表する形で評価することを考える。テーマは自分の勉強の記録を振り返る形ことができていれば何でも良いとし、自分があの時何を考えていたのか改めて思い出すことができれば時空を超えた学びができるのではないだろうか。そして卒業時に生徒はeラーニングで自分の成長を改めて思い出し、生徒自身の財産となることは間違えない。